

幼馴染は変態である。

桜紅月音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕の幼馴染は変態である。

目 次

1. 幼馴染のおっぱいほど良いものはない。	1	8話 水着とか脱ぐものである
2話 幼馴染に頼つたら幼馴染が暴走しました	7	9話 残酷な运命
3話 あゆびよんだぴょん	11	10話 大きい小さいエツな話
4話 もう1人の幼馴染もやばい件について	16	
5話 逆襲撃	20	
6話 歩夢と侑と僕は糸で繫がつている。	24	
7話 試される僕と誘惑の無自覚の悪い女歩夢	28	40 36 32

1. 幼馴染のおっぱいほど良いものはない。

僕のお隣には、幼馴染がいる。

僕が言うのはなんだけど…とても可愛い女の子である。

そして、その幼馴染は毎朝のようく僕の事を起こしに来てくれる。
ただ…この幼馴染は少し…いや、変態である。

「蒼君、おはよう」

カーテンが開けられ事によつて、薄つすらと目が覚める。

「歩夢…？」

「まだ…寝ぼけてるの？仕方ないなあ～」

と歩夢は僕のそばまで寄つて来て、

「蒼君だから…するんだよ」

「耳元でそつと呟いて僕の唇に歩夢の唇が触れるのだった。

「これで起きた？」

2 1. 幼馴染のおっぱいほど良いものはない。

「……完全には……」

「というけど……目が覚めてないのは嘘だ。」

「いや……まあ……完全に覚めてないのは事実だが……。」

「これ以上は流石に恥ずかしいよお～」

「蒼君は……私の……お、おっぱいが好きなんだよね……」
と頬を紅く染めながら言いつつも、僕に近づいてくる歩夢。

「制服越しではあるが……立派に育った物を僕の顔に当てるべくしてくる歩夢。
そのおかげで完全に目が覚める。制服越しとはいえ、柔らかい感触がやつてくるから
だ。」

「歩夢……ブラしてないの？」

「いつもなら柔らかい感触に加えて、ブラの固い感触が来るのだが……今日に關してはな
いのだ。」

「うん……ブラしようと思つたけど……時間無くて……」
「時間無くとも……ブラはしようよ……」

「だって……ブラ付けてたら……蒼君の寝顔見れないじゃん」と歩夢は言つてくる。

「ブラを付けるより……僕の寝顔が優先なの……？」

と歩夢に言うのだが……歩夢からは「当たり前だよっ！」としか返つてこない。

「それよりも……ブラ付けてて当てられるのと……ブラなしで当てられるのだつたら……どつちがいいかな……？」

「照れながら言うくらいなら……言わなくていいんだぞ……」

さつきから頬を紅くしたままの歩夢がこう言つてきたんだけど……僕はそう返す。

「蒼君は、私のおっぱいが好きつて言つたよね？」

「確かに言つたけど……」

「だつたら……どつちがいいか答えくれないかな？」

「言わないとダメなの……？」

「うん」

「僕としては……ブラが無い方がいいけど……」

と歩夢から視線を逸らして言う。

「そりなんだ～。蒼君は、ブラが無かつた方がいいんだね～」

と両手を合わせてさつきまでの顔を真っ赤にしていたはずなのに、とてもいい笑顔になつていた。

「歩夢……？」

「それじゃ、蒼君の好きなおっぱいを押し当てるあげるね」

4 1. 幼馴染のおっぱいほど良いものはない。

こつたのだが……。
そんな日が過ぎた後、なぜか僕の部屋に歩夢のブラが置かれるという謎の事件が起

*
*
*
*
*
*

「歩夢…なんで、僕の部屋にブラ置いてるの…?」

「だつて…蒼君、ブラが無い方が好きって言つたでしょ?」

「確かに言つたけど…」

「だからね、蒼君にお、おっぱいを押し当てる時は、ブラなしだけど…でも、学校の時は、ブラ付けないとだから、蒼君の家で付けて行こうかなと思つて」

「だからつて…男の子の家にブラを置く…?」

「違うよおゝ蒼君の部屋だからだよおゝ」

と言いながらも、僕のタンスの中からブラを出してくる歩夢。

因みに、ブラの色はピンク色だつた。最初のうちは、着替え中は部屋の外に追い出されたこともあつた。

僕の部屋なのに…。

それが…今となつては、着替えを見られることに抵抗心は無いようだつた。

「まあ…他の男の子を部屋の中に入れなければいいだけの話だからいいか…」

「蒼君つて、同好会のみんな以外に知り合い居ないよね…?」

悲しい事を言わないでくれ…。

「でも、タンスの中、開けただけなら分から大丈夫だよ」とタンスの中を見せてくれる歩夢。

6 1. 幼馴染のおっぱいほど良いものはない。

「あつ！私が居ない時、勝手に見て、顔に埋めて匂いでもいいからね？」
「誰もやらないわ！」

こんな幼馴染ではあるが…僕は、歩夢の幼馴染で彼氏である。

2話 幼馴染に頼つたら幼馴染が暴走しました

「侑～助けてえ～」

「ええっえ!? どしたの？」

あの事件の次の日、僕は、もう1人の幼馴染に助けを求めていた。

彼女は、高咲侑。歩夢と同じ幼馴染である。

「歩夢が～」

「歩夢が何かしたの？」

「僕の部屋に来たら分かる」

と侑を、僕の部屋を見てもらう。

そこには、歩夢の下着やらブラが転がってる訳で…

「蒼が歩夢の部屋から取ってきたの?これ…」

うん。何も言わなかつたらそういう反応されるのは分かつてんんだけど…助けを求めて侑を頼つてるんだから、そんな目で見ないで

「僕がそんな事を出来るような人だと思う?」

「いや…ない。私の水着姿見ただけで失神するような蒼が、歩夢の部屋から盗んでくる

なんて無理だと思う。けど、今、失神してないのが気になるけど…」

とまた、冷たい視線をこちらに向けて見てくる。

だから…辞めてつてば。

と言つても無駄だと思うから、こないだの歩夢の言葉は、スマホで保存していた。それを侑にそのまま聞かせた。

「歩夢がやつたのか…」

「だから、これを辞めて欲しいんだよ！ 侑から言つてくれない？」

と侑に伝えた。

「歩夢が蒼の言う事聞かないなら、私が言つても無駄だと思うんだけど…」

「確かに言われてみればそうかも知れない…」

「まあ…蒼の頼みだから、一応言つてみる」

と侑は、立ち上がりつてそう言つてきた。

「侑…流石侑だよお!!」

と侑に抱きつく僕だった。

* * * * *

「侑ちゃんに、蒼くんの部屋に下着は置かない方がいいって言われたけど…蒼君、侑ちゃんに何か言つたの？」

次の日、侑は、歩夢に言つてくれたみたいだ。

それに関してはいいんだ。だが、今、何故か水着姿になつた歩夢に問い合わせられてます。しかも、昨日までは下着しか無かつたはずなのに、その下着が更に増えてる。何があつたというんだ。

「侑には何も言つてないよ…それよりも、なんで、水着姿になつてんの!?」

「侑ちゃんに、蒼は水着姿に弱いから、アピールするなら水着姿見せたらいいよって言われて…」

あいつ、歩夢に何を吹き込んでんだああ!!!!

ダメだ。僕の幼馴染達がおかしな方向に向かつてる…。

「それで…似合つてるかな?」

歩夢は、上目遣いで聞いてくる。

そのせいで、歩夢が僕の顔より下に来るんだけど…そのせいで、水着で隠し切れてない谷間の部分が思い切り見えてしまつてている。

「歩夢…」

「蒼君…？」

「我慢の限界…」ボンっ!

「蒼君!？」

歩夢の水着姿…はとても良かつた。

だけど…刺激が強すぎた。胸が当たるのは大丈夫なんだが…。それは服の上なら更に大丈夫なんだが…。

胸の谷間…胸が生で見えるような水着とかは大丈夫じゃないんだ…。

そして、僕は歩夢の水着姿に見とれて気絶してしまつた。

「歩夢…流石だなあ…」

3話　あゆびよんだびよん

今日も夢の中では、侑が、

「あゆびよんだびよん」

うん…とんでもなく可愛いものが見えた気がする…。

幼い頃の歩夢の姿が…。うん…忘れよう…。

* * * * *

そんな夢から目を覚ましたら…案の定、歩夢の顔が目の前にありました。

「蒼君、凄く嬉しそうな顔をしてたけど…どんな夢見てたの？」
と歩夢は顔を近づけてきてそう聞いてくる。

「歩夢があゆびよんしてた」

と素直に言つたのだが…歩夢の顔がだんだんと紅くなつていく。

「もう！…どんな夢見てたの！」

と僕のお腹を叩きながら言つてくる。
地味に痛いから辞めて…。

「なんでそんなに叩くの！」

「だつて…侑ちゃんにやつて欲しいつて言われたの！」

侑…今度は何をしようと企んでいるんだよ。

夢の中のあゆびよんだけ、もうやばいんだぞ。

「侑…何を言つてるんだろう…」

「そうだよつ！恥ずかしいからやらないつて言つたの！」

「まあ…そうだよな…」

と歩夢から目を逸らしながらそう言う。

「なんで目を逸らして言うの！」

だつて…最近の歩夢の行動を見ていたら恥ずかしさはあるだろうけど…やつてのけ

るあたり…本当はないんじやないつて思うからだよ…。

「いや…男の子の家に下着とか置くのは恥ずかしくないのかあつて思つただけ…」

普通の女子ならやる以前の問題ではなく、こっちから頼まないとやつてくれない：いや、絶対にやらない。

「それは蒼君だから…大丈夫なの！」

「なんで、そこは大丈夫なんだよ！」

「蒼～歩夢は居る～？って、やつぱりいるね」

歩夢とやりとりをしていたら、自然と侑が入つて来て、歩夢の隣に座りこんだ。

「蒼聞いてよ！」

「聞くから、落ち着けって」

歩夢の隣に座るとすぐに侑が感情をむきに出してきて、僕を見ながらそう言つてき
た。

「歩夢が～あゆびょんしてくれない～」

と僕のお腹に顔をこすり合わせながらそう言つてくる。

おいおい：侑。歩夢が凄い顔をしてるから：

「侑ちゃん…さらつと蒼君に抱き着かないで？」

完全に嫉妬してらつしやるから…。

「歩夢があゆびょんしてくれるまで蒼君から離れない」

と僕の腕をギュつて掴んで離さないという意思を歩夢に見せつける。

「そんなの…やるわけないじやん！」

だよね…恥ずかしいって言つてたからやる訳ないよね…。

「それなら…蒼君にずっと抱き着いても文句はないよね…」

「分かつたから…やるから！ 蒼君から離れて！」

言つちやつた…。

「それじや、やつて」

侑…お前も鬼だな…いろんな意味で…。

「あっ！ どうせなら蒼にしてあげたら？」

「えええ！」

侑の発言にびっくり声をあげる。

「やらないと蒼から離れないよーだ」

うわあ…敵に回したくないタイプだ…これは…。

「うう…やればいいんだよね？ やつたら…蒼君から離れてくれるんだよね？」

と歩夢が顔を真っ赤にしながら侑に言うと、侑は頷いた。

そして、歩夢は僕の目の前に来て

「あ、あゆびよんだぴょん」

と歩夢の可愛い姿はしかと記憶の中に残った。

だけど…そこからの記憶はない。

「蒼君!!!」

「歩夢つて罪な女の子だね
「侑ちゃん!!!!」

4話 もう1人の幼馴染もやばい件について

どうして、彼女はあんな風になつてしまつたのだろうか…。
原因は、自分かもしれないのは分かつてているのだが…。

そんな中、彼女から発せられた言葉はこれだつた。

「蒼つてさ、私のおっぱいとか興味あつたりする？」

「!? ゲホツ！ ゴホツ！」

「蒼!? 大丈夫?」

いきなり、自分の胸を見ながら言われた言葉にびっくりして、飲んでいた飲み物を吹き出してしまい、思わず咳き込む。

「大丈夫…だけど…いきなりどした?」

「いやあ、蒼つて歩夢のおっぱい大好きじゃん?」

「…間違いではないが…間違いだからな?」

そう言うと、侑は、『何言つてんだ? こいつ』みたいな感じでこちらを見てくる。簡単
に言えば、あれじやないけどあれだみたいな感じだ。

うん…自分でも何を言つてるのか分からぬ。

「だからさ…私のおっぱいも好きだつたりするのかなあ…って」

それは、自分がただのおっぱい好きなだけじゃねえか。

→これに関しては否定はしないけど（？）

「侑の事は好きだぞ？ 親友として」

「嬉しいけど、今は、私のおっぱいが好きか聞いてるんだけどなあ…」

どこまでその話を持つて行くつもりなんだよ…。

というか：侑がこの話題をしてくるとは思つてなくて、どう返事したらいいのか悩む。

「侑はさ、侑の事が胸で好きつて言われて喜べるの？」

「そう言われたら…なんか悲しくなっちゃうんだけど…」

「だろ？…なら、僕が侑のおっぱいが好きだあああ…と言えないだろ？」

て侑にそう聞くと、侑の表情がさつきまでの表情とは違つて、真つ赤な顔に染まつていつてる。

「言つてるよ？ 私のおっぱいが好きつて…」

と侑から、小さくそう言われて、さつき発した言葉を思い出す。

そして、言つた事：更には大きな声で叫んでしまつたが為に、周りの：人は居ないからいいけど：外に響いてしまつたのを思い出して：今度は、僕の顔が熱くなつていくの

が分かる。

つまり…顔が赤くなっていくのが…

そして、顔を隠しながらその場に倒れ込む

「僕、恥ずかしい事を言っちゃったあああ」

侑の足元であつちこつちに、ひたすらに転がり続ける。

「蒼？もしかして、私のパンツが見たくてそうやって転がってるの？」

「はあ!?」

「いいよ？蒼には特別に見せてあげる」

と侑は、転がっている僕の顔を通り過ぎて、お腹を上に座つてきた

「侑？まさかだけど…顔に乗つけたりとかはしないよな？」

「パンツが見たいんでしょ？なら、私のお尻を蒼の顔に乗つけるしかないでしょ？」
と侑は、お尻を揺らしながら、僕の顔の方へと近づいてくる。

揺れる度に、スカートが揺れてパンツが見えていたが…

「じゃ、乗つけるよ？」

「ちょ…むぐっ!?」

なんとかして侑を止めようと言葉を発したのだが、それも虚しく僕は侑のお尻に挟まつ…いや、埋もれてしまつた。

「パンツ見えてる？それと、私のお尻の感想は？」

と侑は聞いてくるが

「むぐ!!」

しつかりと埋もれてしまつてゐる為、声が出せない状態になつてしまつてゐる。

「くすぐつたいよ〜」

と侑は、そう言いながらもお尻を退けようとはしてくれない。

そして、息をするのも苦しくなつてきた。

「むぐっ!! むぐっ!!（お尻を早く退かしてくれ！）」

「うん？ 私のお尻、柔らかいって？ なら、もつと堪能してね？」

と侑になんとか伝えようとしたが、その努力も虚しく気絶してしまつた。

そして、目覚めたらベッドの上に居て、もう1人の幼馴染の胸に埋もれていましたと
さ。

5話 逆襲撃

もう一人の幼馴染に襲撃された次の日、歩夢がご飯を作ってくれるという事で、歩夢の家にいる。

もちろんが、襲撃してきた侑もいる。歩夢の家を挟んだ隣の部屋が侑の家だから、当たり前なんだが

「蒼君、料理できたよ」

と僕と侑にしか見せないであろう笑顔でそう言つてくる歩夢。

手に持つている鍋は見た目からも分かるようによくてもおいしそうな匂いも漂つてくる。

「歩夢～その笑顔素敵だよ～」

鍋に気を取られている僕とは違つて、隣では侑が歩夢に対してそんな事を言つてる。

「もう侑ちゃんもだけど～私は蒼君にしたの～！」

「ふふふ、こんなに思われてる蒼は、鍋に夢中だけど？」

と侑がそう言つた途端、歩夢の視線が僕にくる。

「やつぱり、歩夢の作る料理はおいしい」

歩夢の視線を感じながらも、歩夢の作ってくれた鍋をひたすらに食べる。

「これは聞いてないね：私も食べよつと」

「そうだね。でも、蒼君が美味しいって言つてくれてとても嬉しい」

と歩夢と侑の会話が聞こえてきて、2人も僕と同じように鍋に手を付け始めるのだつた。

そして、鍋を食べ終えて、しばらくしてから、侑は、ピアノの練習がしたいからと言つて先に帰つていつた。

「蒼君：ちよつと聞きたいことがあるんだけど…いいかな？」
「うん、いいけど？」

歩夢に聞かれるような事はしてないと思つた僕は、何の話だろうと軽い感じで返事を返した。

「昨日：侑ちゃんとお楽しみだつたの？」

歩夢から思つていなかつた言葉が飛び出してきて…思わず吹いてしまう。

そして、心を落ち着かせてから口を開く。

「歩夢：それ、どこから聞いた？」

「聞いたというか：聞いてしまつたというか：でも、お楽しみだつたことは否定しないんだ…」

この時点で、表面上に出てきてないとと思うが…内心、汗で一杯だ…。

「歩夢…ちよつと話し合いを…」

「蒼君と話すことなんてないよ！話し合いがしたいなら、こうするだけだよ！」
と歩夢は、僕を押してきた。

そして、押された事に反応出来なつたことで、床に打ち付けられた。

その上に、歩夢が乗つかつてきて…そのまま、歩夢は段々と顔を近づけてきて、そのまま唇に触れてきた。

そんな時間は、どれだけの時間が過ぎたんだろうか…かなりの時間が過ぎたような気がする。

「ふふふ…私たち、キスしちゃつたね…」

歩夢のその言葉とさつきの行動によつて僕の思考が完全に止まつてしまつていて。

「キスだけで足らないの？」

「そんな事はないけど…」

「もう…蒼君にしかしないんだからね…」

と気づけば歩夢の胸の中にいた。

一体…何があつたらこんなことになるつて言うんだよ…

6話 歩夢と侑と僕は糸で繋がっている。

「蒼君！ 私と一緒にデート行こ？」

ある休日、何も用事もないでの、一日寝てようと布団に包まつてゆつくりと寝ていたら、突然、目の前に歩夢が現れて、デートのお誘いを受けてしまったのである。

「歩夢：今日は、珍しく用事がないからゆつくりと寝てみたいんだけど？」

「む～私に付き合ってくれてもいいじゃん！」

と歩夢は、布団に包まっている僕をなんとか動かそうと布団を無理矢理引っ張つてきた。

僕も、寝ていたいからと歩夢に布団を奪われないようにと抵抗する。

「蒼君！ 諦めて私と一緒にデートに行こうよ！」

「今日は寝ていたいの！」

歩夢との闘いはまだ終わりそうにない。

ここまできたら、お互に引けるものも引けないんだろう…

「蒼君！ つて…うわあ！」

「へっ？」

歩夢と僕が布団をお互いに引っ張っていたため、歩夢が一瞬だけ力を弱めたのか、その反動で歩夢が僕の方に向かって飛んでくる。

そして、飛んだ歩夢がそのまま僕のお腹にぶつかってきた。

「うげっ…」

歩夢の顔が僕の溝に入ってきた：それで声が出てしまった。

「蒼君？ 大丈夫？」

「痛てえ… 僕は、大丈夫だけど… 歩夢こそ大丈夫？」

「私は、蒼君のおかげで何もないよ」

歩夢は無事だったのか。それならいいか…

と安心して、目を開けると歩夢の顔が目の前にあつた

「蒼君？ このまましちゃう？」

「いや… やらないから…」

とりあえず…そこをぞいてくれ…

「じゃ… ギュつてさせてね」

「はっ？」

すると、歩夢の手がすっと伸びてきて、あつという間に僕の頭の背後に回つて来て、

そのまま歩夢の胸の谷間の方へと…

「蒼君、私とデートしてくれるって言つてくれるまで離さないからね」

「むう（なんでこんな事になつてんの!?）」

「おやおや、楽しいことになつてるね」

「あっ！侑ちゃん！」

歩夢とやりとりをしている間に、侑が家の中に入つてきたのか…。

歩夢も侑も僕の家の鍵を持つてゐるから、入つてくるのは分かるけど…なんでこんなタイミングでやつてくるんだよ

「よしつ！私も混せてもらおうかな～」

えつ？混せてもらうつてどういう事…？

「侑ちゃんも蒼君を抱きしめたいの？」

「うん！歩夢が独り占めするのはずるいでしょ？」

「分かったよ～」

と歩夢は、僕を抱きしめるを辞めて、解放してくれた。

とりあえず…これで空気を吸える。

「じゃ、今度は私が抱きしめるね！」

と侑は、僕の顔に身体を押し付けてきた。

そして、歩夢ほどはないけど：平均以上はあるであろう物の谷間に顔が挟まる。

「じゃ、私はこつちから抱きしめてあげようかな」

と歩夢の声が聞こえてきたと同時に、僕の背後に柔らかな感触がやつてくる。

「蒼、私と歩夢のおっぱいの感触を同時に感じてるんじゃない？」

「ふふふ、蒼君が喜んでくれるといいな」

「むぐう～」

侑のおっぱいから逃げたくても、歩夢のおっぱいが背後にある為…逃げれない状態になつてゐる。

「私さ、歩夢のおっぱいに蒼埋めたことないんだから、後で感想聞くからしつかりとどんな感じだつたのか教えてね」

と侑の声が聞こえてきたりとか…

「もう！・私のおっぱいより侑ちゃんの方がいいよお～！」

という歩夢の声が聞こえてくるが…それよりも解放してくれという気持ちが強かつた：

この後、歩夢と侑とデートすることになつた。

7話 試される僕と誘惑の無自覚の悪い女歩夢

今日も平和だ。

だからこそ、こうやつてベットの上でゆっくりと寝ていられるのだ。
いつものように、歩夢や侑が突撃してきては、無理やり起こしてくることもない。
だから、ゆっくりと寝れると思つていたのだが：目を開けたら、視界に映つたのは、見
た事があるような物が映つてきたのだ。

その何かに恐る恐る手を差し出し、手とそれが触れた瞬間、手にとてもじやない柔ら
かな感触がやつてきたのである。そして、同時に

「…蒼君…そこは…辞めてえ…」

といやらしい歩夢の声が聞こえてきたのだ。なんで、歩夢がいるのかが疑問だが：
歩夢が、僕の手を退かそうとして、寝返りをしようとする、手に触れていたものが
上下に弾む。

つまり、さつきまで触れていたのは、歩夢の胸だとその時に分かつた。

「歩夢!？」

布団を思わず、蹴り飛ばし、身体を起こして、歩夢の方を見ると、確かにそこには歩

夢がいて、パジャマ姿で寝ていて、胸元のボタンは外れていて、ブラが見えてしまつていた。

「…蒼君…布団…かけてえ…」

歩夢がそう言つてきたので、蹴り飛ばした布団を取つて、歩夢の上にかけてあげる。そして、布団をかけるとすぐさまに布団を抱え込んで

「蒼君の匂い…」

と独り言を言つて、寝ているのに、顔の表情が明るくなつた。

「いや…布団だけでそんな表情するのかよ」

普段の歩夢は、恥ずかしながらも『大丈夫？おっぴい揉む？』とか言つてきては、そのまま抱きしめてきては、その自慢の胸で殺しにかかる歩夢なのだが…意外と…いや、その時点でかなりあれか…

「さて…どうするか…」

一瞬、侑に助けを求めるかと思つたが、侑の事だからこのチャンスを生かして、僕の事を襲つてきそうだが、この案は、真っ先に没だ。

「仕方ない…」

結局、僕が歩夢を起こすことにした。

そして、歩夢の肩を叩いて

「歩夢～起きて～」

と歩夢に聞こえるように言つた。

そしたら、布団の中から急に手が伸びてきて、僕の顔を捕まえたかと思つたら、そのまま自慢の胸に抱え込んだ。

「蒼君…抱きしめてあげるよ～」

「むぐう!!」

本当は起きてるんじゃないのか!!

じやなかつた、ここまで咄嗟に行動なんて取らないはず。

しかし、僕がどんだけ暴れても、歩夢のシールドは思ったよりも固く、解除できなかつた。

それに、暴れていて、胸に埋もれている事によつて、酸素が無くなつていく。

「蒼君～そんなに暴れちゃダメだよ～」

歩夢は、暴れる僕をなんとかしようと、足で動けないよう、僕を固定しようとしてきた。

こうなると、ますます状況が悪くなつてくる。

ここまでくると、侑に助けを求めるか…

いや、助けを呼ぼうにもスマホも無ければ声も出せない…
こうなると、歩夢が目を覚ますのが先か僕が落ちるのが先か…
そんな事を考えていると、

「…蒼君…どこお〜?」

歩夢が起きて、そんな事を言つた。

今回は、なんとか耐えきつた

そう思つたのだが

「なんで? 蒼君、私の胸に埋もれてるの? もしかして、もつと胸に埋もれたいのかな?」
と言つて、さつきよりもギュッと力を入れてきて、完全に息が出来なくなつてしまつ
た。

あつ…これはだめだと思ったのと同時に視界が真っ暗に染まつた。

歩夢の声も聞こえてきたが…なんと言つてたのかまではつきりとは覚えてない…

8話 水着とか脱ぐものである

「ふふふ…これで蒼君は私の物…」

「歩夢…その手に持つてるのは何…?」

明らかに、危ない物を歩夢が持つているのが分かる。

そして…歩夢の表情が危険だという事が伝わってくる。

「何つて? 私と蒼君が幸せになれる薬だよ?」

と笑顔で言つているが、言つてる内容が怖い…。

「それはいいんだけど…明らかにやばいやつだよね…それ…」

「蒼君は何も考えなくていいんだよ?」

と歩夢は、僕の目の前に座つて。

「蒼君は、これを見てね」

と歩夢は、服を脱いで…

「歩夢?」

「蒼君のために、水着着てきたんだよ? 感想欲しいなあ~」

と歩夢は、水着という薄い布でしか守られていない身体を、僕の身体に押し付けてく

る。

やつぱり、服の上からでも歩夢の大きさと柔らかさが分かる。

「似合つてるよ」

「もう、それだけなの？」

「これ以上、何を求めてるの？」

「最近、侑ちゃんにばつかり相手して、私に相手してくれてないじやん…」
確かに、侑とプール行つたりとか、みんなで海に行つたりとかしたけど…。
みんなの水着姿可愛かつたけどね

「侑ちゃんと私に内緒でプールに行つたんでしょ？」

「なんで知つてるんだ…」

と歩夢に聞いたら、歩夢はそつとスマホの画面を見せてきた。

そこには、僕に身体を押し付けて一緒に写真を撮つている侑が…

「内緒つて言つておきながら…自分から言つてるじやねえかよ」

「侑ちゃんに抱き着かれて嬉しそうにしてるよう見えるんだけどね」

明らかに歩夢の表情がやばくなっている。

かと言つて、下手に刺激は出来ない。

「とかいいつつ…歩夢だつて、今、抱き着いてるよね？僕はとても嬉しいんだけど」

水着を間に挟んでいるとはいって、歩夢の胸と密着しているといえばそういう解釈になる状況…

「そう？それなら嬉しいな」と歩夢が笑つた。

「だけど…このままだと納得はいかないかな…」

あれ…また、不穏な空気が…

「だつて、水着を着てるでしょ？」

「それは見れば分かるよ？」

何回も言つてゐるけど、なんとか私服の下に水着を着ていて、服を脱ぎ、水着姿になつて、身体を押し付けてきてゐるのだ。

「だから、水着脱いでいい…？」

「えつ…？」

なんか突然、言い始めたんだけど…

「だつて、侑ちゃんよりいい事つて水着を脱がないといけないでしょ？」

「いや…流石に脱ぐのはだめでしょ…」

と拒否しようとしている中で、歩夢は今にも脱ごうとしている。

「ちょ、話している間に脱ごうとしないで…」

歩夢の両手を掴んで、脱ぐとしているのを止める。

「なんで止めるの！蒼君のために脱いであげようとしてるのに！」

何かしらずれてる感が凄いが…

「侑には良い所があつて、歩夢にもあるよ？そこまでしてする事と思わないんだけど…」

「うう…蒼君がそう言うなら、脱ぐのは辞めるけど…代わりに…」

と歩夢は僕の体を押し倒ってきて

「これぐらいは許してね」

とそのまま歩夢の好き勝手にされた。

9話 残酷な運命

運命とは時には残酷である。

目の前には、スカートを捲つて中が見えている歩夢と…完全に怒っている侑がこちらを見ながら立っている。

「私には手を出さないで、遂に歩夢に手を出したの？」

「いえ…歩夢が勝手に…」

「ん？ 何か言つた？」

「いえ…何も…」

歩夢が勝手にやつた事だと言おうとしたのだが、侑は言わせないという感じで僕の声を遮るように言つてきた。

「でも、歩夢に手を出したという事は、私にも手を出してくれるよね？」

何故そうなるのか…

普段から、この2人から襲撃を受けている身ではあるが、手を出していいのか？ 実際には手を出してはいらない。少なくとも自分からは。胸を触つた？ いや、あれは事故だ。

「だ！か！ら！手を出してはいないつて！」

「またまた、嘘なんて言わないでいいんだよ？」

うん。だめだこれ。

話なんてあつたものではない。というか聞きやしない。

どつかのうつせえわの歌詞をそのまま口に出したい

「話を聞く気、1ミリもないよね？」

と侑に聞くと、侑は、視線をあちこちに向けてこちらを向こうとはしない。完全に図星じやねえか。

「侑ちゃん：蒼君を堕とすには、侑ちゃんもスカートの中見せてあげないと」

侑の背後から、とんでもない事をさらつと言う歩夢。

変なことを言うな。侑が暴走しちゃうから。

「歩夢？大丈夫だよ？私、そんなことしなくても堕とせるから」

と侑は、ニコツと歩夢の方を向いて笑っている。

暴走しなくて良かつたとホツとしている自分と何をされるか心配の自分がいる。

「ということで蒼？」

気づけば侑の顔が、目の前にあつた。

「どうした侑？」

「今から、蒼を堕とします。歩夢よりも楽にしてあげるね？」

「ううと侑は、いきなり胸を顔に密着してきた。

「むぐつ」

「蒼の顔つて程よくいい形してるから、私が気持ちよくなるんだよね」
と言いながら更にぎゅっと抱きしめる力を強めてくる。

歩夢程大きくはないが、それでも大きな侑の胸は、息をまともに出来なくするくらいには大きい。

「侑ちゃん…おっぱいを使うなんてずるいよ…」

「そんな事言つてるけど、歩夢だつて水着で胸を強調させて蒼君を誘惑してたじゃん」
確かにそうだ。歩夢もやつてた。

どつちかというと歩夢の方が刺激が強かつた。

水着なので、ブラとかは無く肌が直接見えており、更に言えば谷間も見えていた。まだ侑は、服を着ているので少なくとも谷間は見えていないし。感触的にブラは着けているだろう。

「ううより、さつさと解放して欲しい。

「侑ちゃん、解放してあげた方がいいんじゃないかな？そろそろ、苦しそうだよ？」
「歩夢？そんな事言つてるから、蒼君は靡いてくれないんだよ？もつと自分の持つてい

る物おつぱいをアピールしていかないと！」

と言われ、歩夢は、黙つてしまつた。

そこは止めてくれ…

もうだめなんだが…

「あれっ？蒼君、やたらに静かな気が…つて蒼君!?」

10話 大きい小さいエツな話

最近、また歩夢の胸が大きくなつたという話を聞いた。

侑が歩夢の部屋で、僕にわざと聞こえるように叫んでいたからだが。

歩夢は、恥ずかしそうに声をあげながらも、嬉しそうな声もあげていた。恥ずかしいのか嬉しいのかどつちかにしろという話なのだが。

そんな事はさておき、問題が発生した。

『…』

今、僕の目には、歩夢と侑の2人が寝ている。

しかも、僕の布団を挟むかのようにして…

そして、僕は2人に抱きつかれている。

あちこちに、2人の柔らかい感触が当たつていて。

両腕に掴まれいるため、腕を動かせないため、目覚まし時計はおろかスマホすら手に取れない状態である。

しかし、目覚まし時計は7時に設定しているが鳴つていないので7時前だという事は

分かる。

今、冬なので外は暗いため、カーテンから光は差し込んでいない。

「で、なんで2人とも下着姿なんだよ…」

なんとか2人を起こさないように工夫をしながら体を起こす。

相変わらず腕は動けないのだが。

2人を見た瞬間、僕はびっくりするより呆れ返っていた。

布団があるとはいっても暖房もストーブもないこの部屋は寒いのだ。

そんな中で下着1枚で寝ている2人。

でも、こうして見ると2人の体つきがよく分かる。

変態な意見になるかもしれないが、2人とも出るところは出ていて、きゅつとしている。

侑は、歩夢に比べて大きくないので、ブラの中にしっかりと収まつており、丁度いい大きさ。

対して、歩夢は腕にしっかりと抱きついていることもあってなのか、最近大きくなつたのが原因か。ブラのサイズが合つてないのかブラから完全にはみ出している。目の保養になるといえばなるだろう。

そんな事を考えていると、スマホと目覚まし時計が7時を教えてくれるかのようにジ

リジリとした音とアラームというサウンドバックを奏てる。

「もうそんな時間…？」

「歩夢う…服とつて…」

流石の2人もこんな騒がしい状態になれば起きる。

そして、侑よ。まだ寝る気か

「蒼君～このブラどう似合つてたかな？」

と完全に目が覚めた歩夢は、本人曰くでかくなつたという胸を強調しながらブラを見せつけてくる。一步、間違えれば見えるラインまで

「歩夢らしいと思うよ」

「えへへ、そつか～」

と適当に褒めると歩夢は、頬を赤くしながら笑顔で僕の頬にキスをして立ち上がる。

「頑張つて、パンツも頑張つて挑戦したんだけどどうかな？」

ベッドの上で立ち上がつて僕の方にお尻を見せながら言う歩夢。

お尻が丸見えになつてているのだが、大丈夫なんだろうか？

「これつてバツクつていうの、健康に良いつて聞いて、勝負下着にもつて書いてあつた

挑戦と言つてたからやつぱり恥ずかしいんだろう。」

因みに、黒色でレースのついたエツチな奴である。

「そんな歩夢も似合つてゐるぞ」

「えへへ、ありがと」

やつぱり歩夢は可愛い

「歩夢、私の服はまだ〜?」